外国語音の仮名表記

工藤力男

要旨

中国の通信機器企業「華為＝HUAWEY」の中国語音を、日本の報道機関は「ファーウェイ」と読みかつ書く。スペインの人名 'Don Juan'を、日本では「ドン・ファン」と書いてきた。朝鮮の地名「江華」を、日本ではかつて「カンホワ」と書いていたが、近年は「カンファ」と書いている。これらの実例を通して、日本における外国語、特にハ行音の仮名表記について考える。外国語を日本語の中で用いるに際して、片仮名は有力にして便利なシステムであるが、各言語の音韻体系が異なるので、難しく不安定な面を有することについて述べる。なお、はじめの二つの節は本論の導入部に相当し、西洋人の名を仮名書きする際に生じた、長音の扱いに関する前稿の補論である。

中国語について、ピンイン表記は『岩波日中辞典』(1983)による。

紀年は、本文中では元号によるが、括弧内に文献の刊行年などを記すときはキリスト暦による。

目次

1　「ケネディとガウディ」補論
2　長音符号の行方
3　「華為」の怪
4　意外な結末
5　「ドン・ファン」を考える
6　「江華島」をめぐって
7　外来語仮名遣い

1　「ケネディとガウディ」補論

大修館書店の月刊雑誌『言語』第10巻10号（1981.10）が「コンピューターと言語」を特集したとき、編集部の求めに応じて届いた原稿八篇の題では、すべて「コンピュータ」となっていたという。そのことにも触れて、わたしは「ケネディとガウディ――辞苑閑話・八――」を『成城文藝』243号（2018.4）に発表した（以下、これを「前稿」と呼ぶ）。

前稿執筆の契機は、アメリカの第三十五代大統領ＪＦＫの暗殺から五十四年を経て、事件に関する機密文書が公開されたことによる。この事件は、それが起こった町の名によって「ダラス事件」とも呼ばれる。ＮＨＫテレビのニュースで、字幕には「ケネディ」とある一方、アナウンスは一貫して語末の延びた「ケネディー」であった。

ダラス事件を詠んだ短歌三首が講談社版『昭和萬葉集』に収められている。そのうちの一首を次に掲げる。

銀杏（いちやう）落葉の上に散りたる号外にケネディはまだ生きて笑へり

初句こそ字余りであるが、第二句以下には字余りがないばかりでなく、「ケネディ」は三拍語なので、わたしの言語感覚では、第四句は字足らずである。詠者は「ケネディ」を四拍語として詠んで定型句のつもりなのだろう。わたしはそう推測した。

前稿の標題に用いたもうひとりの外国人「ガウディ」は、スペインの著名な建築家である。この人名を詠んだ俳句を、『カラー版新日本歳時記・冬』（講談社　1999）から借りて、拙著『季語の博物誌』（2017　和泉書院）の十二月十四日条に載せた。

大くさめガウディの塔ゆらしけり

この句の中七が、わたしの感覚では字足らずなので、「ガウディの塔を」から助詞「を」が誤脱したのかとも考えた。そこで、「字足らずのまま引いた」と附言したのだが、あまたの現代俳句の中からあえてそのような句を選んだのだから、歳時記の編者はこれでよしと判断したのだろう。すなわち、詠者も編者もこれを字足らずとは感じないのだ。

上記の二つの固有名詞では、一拍を表記するはずである「ディ」を二拍に読むことを求めているらしい。前稿は、それを直接の対象として論じながら、日本語音韻史におけるダ行音の変化にも言及し、それと仮名表記とのずれを考えたの

であった。

以上、本学会会員の多くの方は、前稿の掲載誌を容易には手にしえないと思うので、本論に先だって説明した。

2　長音符号の行方

横文字から借りた語について、従来用いられた語末の長音符号「ー」を省く傾向がある。前節に挙げた短歌・俳句はその最たるものであるが、その弊害についてさらに考える。

飛田良文・佐藤武義両氏の編集に成る『現代日本語講座』（明治書院）と題する六巻のシリーズがある。その「第6巻文字・表記」（2002）には、十人の執筆者による十篇の論稿が載っている。その「符号の問題」に次の記述がある。

このほか「エレベーター」も長音符号が消滅しつつあるし、「データ」に至っては、もはや「データー」を見かけることはなくなった。（p.117）

これは、「データ」がラテン語のdataに由来することに思い至らぬ誤認による発言である。

別の筆者による「外来語の表記」にも次の記述がある。

語例はそれほど多くないものの、データとコンピュータなどは共通してーを省略する傾向のある語であることがわかる。（p.166）

こんな初歩的な勘違いの記述が、「講座」と銘打つ書物に堂々と載る日本語学の現実を知らねばならない。たかが長音符、と侮れないのである。

外来語の表記に関して、半世紀以上も前に書かれた発言がある。金田一春彦『新日本語論』（筑摩書房　1966）である。序章が「「日本語は乱れている」というが」と題されており、「あとがき」に見える執筆の趣旨にも明らかなように、昭和卅年代にかまびすしかった、日本語の乱れ論や国字問題論争に対する、金田一氏の一つの「答案」ともいうべき書である。わたしは、刊行直後に共感して読んだはずだが、細部についての記憶は消え去っていた。最近、別の目的で手にする機会があり、ページを繰っていて、ある記述に再会した。少し長くなるが、第三篇の「第五章　現代日本語の文字について」から引く。

戦後のかなづかいでことによくないのは外来語で、カルシュームをカルシウムと書き、カリュームをカリウムと書く類である。これは、現代語音を考えずに、原語-umというつづりを頭において規定したかなづかいで

ある。和語のヨロシューゴザイマスを「よろしゅう……」と書いて、カルシウムを書くという点には、完全な混乱がある。ケネディなども、当然ケネディーと書くべきで、もし原語に近いことをねらうならばケネリと書くべきである。

記述は少し荒いが、これは、前節に引いた拙稿の趣旨と重なるばかりでなく、私見よりはるかに過激な言説である。外国語由来の片仮名表記が奇妙な事態にあることは疑いない。そして、かかる現象は今や日常茶飯事である。

次節から、外国語音を仮名で表記する際に生ずる問題を広く考える。初めにいわゆる「中国語」を対象にする。この「中国語」という呼称は、言語学的には不正確である。漢人の言語の意で「漢語」とすべきなのだが、非専門の方々にも読まれることを予想して、ここでは、世にふつうに行われる呼称「中国語」を用いることにする。

3 「華為」の怪

一昨年十二月、中国の通信機器の大企業、「華為技術」の最高財務責任者たる孟晩舟（もうばんしゅう）氏が、米国政府の要請をうけてカナダで逮捕された。これを契機に米中両国の関係が一気に悪化し、それに関する報道は連日メディアを賑わわせた。それ自体、国際的・政治的な問題であるが、わたしの関心は、その企業名の「華為（かい）」にある。

「華為」は、放送では「ファーウェイ」と読まれ、片仮名表記もそのままで、新聞報道も異なることがない。だが、この企業名「華為」のローマ字表記は'HUAWEI'である。孟氏の母国、中華人民共和国の「中華」は、ピンインでzhōnghuáと書かれる。したがって、華為の「華」の発音は基本的にはhuáである。その「華」を含む若干の語の発音を順不同に示すと、「華南」はhuánám、「繁華」はfánhuá、「華麗」はhuálì、「豪華」はháohuá、「華飾」はhuáshìである。このように、語が変わっても、「華」の発音は変わらない。「華為技術」の「華」を日本のメディアは「ファ」と書き、そう読むわけだが、その根拠は何なのだろうか。

昭和四十七年、中国から贈られた二頭のジャイアントパンダが東京の上野動物園に来た。その愛称は康康（カンカン）と蘭蘭（ランラン）であった。上野動物園のホームページによると、それ以後に日本に来たパンダの愛称は、第二代が歓歓（ホァンホァン）、第三代が飛飛（フェイフェイ）、いずれ

も漢字一字の音を繰り返して呼ぶもので、中国人社会の幼児の呼び方の慣例を模したのだと思う。

第二代パンダの愛称に用いられた「歓」の発音は、北京官話ではhuānであり、「華為技術」の「華」のそれはhuáである。つまり、この二つの漢字の母音部分は全同なのだから、仮名書きもそうあるべきである。

わたしの学んだ初級中国語の知識では、語頭音が片仮名「フ」で書かれる漢字の頭子音のピンイン表記はfで、例えば、夫婦（fūfù　フーフ）、発音（fāyīn　ファーイン）、法律（fǎlǜ　ファールー）、富豪（fùháo　フーハオ）であった。

右のパンダの愛称を同じようにピンイン表記すると、「歓歓」はhuānhuān、「飛飛」はfeifeiであり、会社名の「華為」はhuáwèiである。ここには何の問題もない。わたしが問題視するのは、日本の報道で、これが「ファーウェイ」と書かれ、かつ読まれていることである。これでは、華為＝fāwèiとなる。こんな変なことがなぜ起こるのだろう。

4　意外な結末

日本列島に住む人々が西洋の言語に初めて本格的に接したのは、十六世紀のポルトガル語とラテン語だと言えるだろう。江戸時代には、一部の人たちにオランダ語や中国語も流通し、幕末には英語を中心とするヨーロッパの言語の時代が訪れた。明治維新から百五十年のいま、公教育の小学校では英語の学習を始めようとしている。

HUAWEYの「ファーウェイ」で行きづまったわたしは、専門家の教えを請うべく、中国語学者で北海道文教大学教授の佐藤進氏に助言を求めた。即座に返ってきた佐藤氏の懇切な教示によって、我が疑問はたちどころに氷解した。だが、それは余りにも意外であっけない結末であった。

この件、すなわちHUAWEYを「ファーウェイ」と読み書きする違和感を、佐藤氏は、つとに他の中国語学者たちと話題にしていたのだという。佐藤氏によると、何しろ当の会社の日本法人である「華為技術日本株式会社」が、仮名表記を「ファーウェイ・ジャパン」と公称しているので、はたの人間が口出しする余地はない。そのことを、誰かが言挙げしたという話も聞いていない、ということであった（電子メール2019.3.23）。

その会社のホームページを見ると、開いた扇子のような八弁の花びら状のロゴマークと、ローマ字表記のHUAWEY、

片仮名の「ファーウェイ」がある。報道のとおりである。それにしても、日本法人は、なぜ、かかる紛らわしい仮名表記を採用したのだろう。これが通るなら、上野動物園の第二代パンダの愛称「歓歓」は、「ファンファン」となるはずである。

昨年十二月、わたしは、たまたま出講していた関市の市民大学の教室で、萬葉集講座の出席者にアンケートを試みた。その質問の後半は次のとおりである。

「ファーウェイ」という会社名は、英語圏では、当然ローマ字で表記されています。その頭文字は何だと思いますか。思いついた一字を書いてください。

その大半が還暦過ぎと思われる十七人の受講者の回答数は、F：10、A：2、P：1、W：1、H：0、無回答：3であった。わたしは安堵した。片仮名「ファ」で写される外国語音に対する、これこそ正常な日本語話者の感覚だと思うからである。

ここで、日本人の文字学習の過程をふりかえってみる。大半の日本人は、小学校低学年までに仮名文字を学ぶ。それは一般に「五十音図」という表にまとめられている。やがて、この図に対して微妙な違和感をいだく機会が訪れる。典型的には、ヘボン式のローマ字綴りを学ぶ時である。まずサ行の「シ」、次いでタ行の「チ」「ツ」、そしてハ行の「フ」について、それぞれ同行の他の拍と同じ子音で書くことに不自然さを感ずるからである。HUAWEYの仮名書き「ファーウェイ」についても同様だろう、とわたしは考える。

なお、音声学を少し修めると、「ヒ」の子音が「フ」の子音とも、「ハ・ヘ・ホ」の子音とも同じではないことを知る。だが、日本で普及したローマ字表記にこれが反映することはなかった。

一年前に着手した本稿の執筆は一向に進まなかった。酷暑と焦りで苦しんでいた八月十三日午後、時事通信社が「米、中国5社の取引停止」という記事をインターネットに配信した。その題に言う「5社」のうちの一社は、「浙江大華技術（ダーファ・テクノロジー）」である。それを『ウィキペディア』でしらべると、英語名は'Dahua Technology'とある。社名の「華」の中国音'hua'を、「ホア」ならぬ「ファ」としたのは、「華為」を「ファーウェイ」と書いたことに通ずる。日本の企業社会や報道の世界には、かかる風潮が広がっているようだ。

5　「ドン・ファン」を考える

国際関係の大きな話題が米中間のHUAWEIであったころ、テレビのワイドショーでは、和歌山県田辺市の富豪の変死が話題になっていた。その人はよほどの艶福家であったらしく、中世スペインの伝説の放蕩児の名によって「紀州のドン・ファン」とも呼ばれていた。

モーツァルトの歌劇「ドン・ジョヴァンニ」で知られるその名のスペイン語形'Don Juan'を、日本語で読んだのが「ドン・ファン」だという。『ウィキペディア』によると、昭和廿四年に、ホセ＝ソリーリャの戯曲が、高橋正武の翻訳で「ドン・ファン・テノーリオ」として岩波書店から刊行されている。この訳書が「ドン・ファン」の表記を日本社会に定着させる契機になったらしいのだが、その詳細をわたしはまだ極めえずにいる。

わたしは中学生のとき、エロール・フリン主演の米国映画「ドン・ファンの冒険」を見たことがある。彼が好色漢たることは知らず、関心はもっぱら活劇場面にあり、原題などには無頓着であった。そのころ、もし「ファン」の綴りを問われていたら、「Fanかな、Funかな」とでも答えただろう。原題を調べると、'Adventures of Don Juan'とある。「ファン」の語頭に相当する子音は、FならぬJなのであった。

そこで、わたしのスペイン語にわか勉強が始まった。《日-西》の対訳辞書『改訂版和西辞典』（白水社　2001）を見ると、「ドン・ファン　Don Juan」とあり、今の日本の報道に見るものと同じである。一方、《西-日》の対訳辞書『クラウン西和辞典』（三省堂　2012）には、Juanは男子の固有名として掲出され、発音は［xuan］、仮名表記は「フアン」で、「ア」は小書きされていない。この辞典には、普通名詞「fan（英）」が掲出され、対訳は、小字の「ァ」によって「ファン、愛好者、ひいき」とある。この二語を仮名表記するにあたって、「ア」の大小で書き分けたのである。

スペイン語の入門書によると、男子名Juanの'Ju'の読み［xu］は、唇を狭めて発音する日本語の「フ」には遠く、むしろ、喉の奥から強く息を出す「ホ」に近い音である。したがって、Juanの仮名書きは、むしろ「ホワン」が適当なのだという。

堀内克明監修の『カタカナ外来語略語辞典』第四版（自由国民社　2011）も「ア」の大小を生かした記述で、「ドン・

フアンが正しいが、間違ってドン・ファンともいう」と厳しい。英語を母語とする人たちは、一般にJuanを［hwa:n］と読むのだから、語頭を「ファ」と仮名書きしたら変だと思うだろう。そのことから、わたしには思い出されることがある。

［x］や［h］に続く［wa］の発音は、初級英語の時間に教わった、what, why, which, while など、綴りが'wh'に始まる語の発音に通う。教科書に密着してアンチョコなどと呼ばれた学習参考書には、原文の読み方が片仮名で示されていた。これらの各語は、「ホワット」「ホワイ」などであって、決して「フワット」「フワイ」ではなかったと思う。だが、何しろ七十年も前の記憶なので、甚だこころもとない。

そこで、三省堂編修所編『カタカナで引ける英和辞典』（三省堂 2000）によって上記の語などを見ると、以下のようにまとめることができる。

ホワト＝whát　何
ホワイ＝whý　なぜ、どうして
ホウィチ＝which　どれ、どちら
ホウェン＝whén　いつ
ホウェア＝whére　どこ（に［で、へ、から］）
フー＝who　だれ、どんな人

これらは、わたしの記憶の底に沈んでいた仮名表記に等しい。この辞典には、white＝ホワイト、wheel＝ホウィール、whale＝ホエール、whistle＝ホイッスルなどもある。

もう一点、研究社辞書編集部編『カタカナで引くスペリング辞典』（研究社 2003）によっても、三省堂版と異ならない結果が得られたが、重複を厭うてここには引かない。

以上の記述から、'wh'で始まる英語の音を日本語に摂取するばあい、「ウー」へと続くもの以外は、「ホ」の仮名で書く伝統のあったことが分かる。音素文字で書かれた英語を音節文字の仮名で書くには、これが最も適切だったのだろう。

日本語の「フ」と「ホ」を比べると、「フ」の子音は両唇摩擦音で気息が強い。それ対して、「ホ」は声門音で気息が弱い。そこで、［ho］に続けて［w］や母音が発音されると、その［w］や、続く［a］［i］［e］［o］が響いて、［ho］の母音は余り耳につかない。それで、この仮名書きが定着したのではなかろうか。これらの単語が、英国では［h］が発音されない伝統があるのはそのせいか、と素人のわたしは思う。

中世スペインの伝説の色男'Don Juan'に対して、中世イングランドには、伝説の義賊ロビン＝フッドがいる。ドン・ファンと同じように、「フッド」の綴りを問われたら、わたし

などは'Food'と答えかねないが、じつは'Hood'なのであった。上田和夫編『イギリス文学辞典』（研究社　2004）の示す発音は［hʊd］である。ここにも、ハ行の仮名で摂取された外国語と日本語とのずれがある。なお、シャツやブラウスなどに多く用いられる止め金具「ホック」の綴りは'hook'である。それは、物を吊り下げるために壁や柱などに取り付ける鉤の「フック」でもあるのだった。

スペインの色男の名は、日本には少しずれた形ではいってしまった。いま少し神経をはたらかせていたら、それは避けられたはずである。同じように、中国語「華為」のローマ字表記'HUAWEI'の仮名書きは「ホアウェイ」でいい。これがわたしの考えである。

6　「江華島」をめぐって

日本と同じく漢字文化圏に属する朝鮮半島で、漢字「華」がいかに扱われたかを考えたい。そこで選んだ語は、近代日本の外交史上で忘れ難い地名「江華島」である。

自分の机辺には、外国の地名などを確かめるために開く簡便な地図として、家族が高等学校で使った検定済教科書が二点ある。そのほかに『国民百科事典』の地図の巻もよく使う。朝鮮の地名には『朝鮮語辞典』（小学館　1993）の「朝鮮半島全図」も使うが、これは漢字とハングルの併記なので、日本語読みを考えるには役だたない。

上記の教科書二点のうち、『高等地図』（秀文出版　1975検定　以下、Aとする）は、「朝鮮（南北朝鮮）」のページで、仮名表記に時々漢字を括弧書きしている。目当ての地名は「カンホワ（江華）湾」とある。もう一点の『高等学校地図』改訂版（二宮書店　1985検定　以下、B）の「朝鮮・中国東北地方部」のページには、仮名書きの地名に漢字を併記して「カンホワ（江華）島」がある。なお、北朝鮮の広域地名の「黄海南道」には、「ホアンヘナム（黄海南）」の表記がある。

『国民百科事典』の「地図」（平凡社　1979）は地名の記載密度が低く、「江華」は見えない。そこで、発行時期がA・Bに近い世界地図を探して、『万有百科大事典』の別巻2『世界大地図』（小学館　1976　以下、C）に出会った。これは地名の記載密度が高く、カンホワ（江華）とあるほか、ホワチョン（華川）、ホワスン（華順）もある。「華」はすべて「ホワ」と読まれているのである。

地図コレクションを特色とする岐阜県図書館で近年の検定済教科書が得られた。『新高等地図』（東京書籍　2012　以下、D）には、「カンファ島　江華」、「ファチョン　華川」、「ファンヘ　黄海」が見え、『詳解現代地図』（二宮書店　2016　以下、E）には「カンファ（江華）島」、「ファチョン　華川」、「ファンヘナムド　黄海南道」がある。

右記のように、朝鮮の地名「江華」の読みが、地図A・B・Cでは「カンホワ」、地図D・Eでは「カンファ」なのである。後者は、本稿の出発点になった、中国の一企業名の「華為　HUAWEY」が「ファーウェイ」と書かれたことに似ている。「江華」の読みが「カンホワ」と書かれた地図三点のうち、最も遅いBは昭和末年の発行である。これだけから結論するのは危険だが、ざっくり言うと、かつては「カンホワ」が行われていたが、平成期以後、「カンファ」が広がったようである。なぜだろうか。

その疑問をかかえて一年近い彷徨の末に巡り合ったのが、財団法人教科書研究センター編著の『新　地名表記の手引』（ぎょうせい　1994）であった。これは、文部省の委嘱によって、児童・生徒の学習指導の用に供すべく作られた『地名表記の手引』（1978）の改訂版である。それに携わった改訂調査研究会委員は廿人、朴（ぼく）という朝鮮人らしい名も見え、わたしが知る著名な国語学者二人も含まれる。

その〔付表1〕「地名の書き方の例」の（3）「韓国・北朝鮮の地名」には百十の地名があり、その一つが「カンファ（江華）島　Kanghwa-do」である。旧版では「カンホワ〔島〕Kanghuwa　江華」であった。「江華」の読みが「カンホワ」から「カンファ」に変わったのは、どうも人為による結果だったようである。類似の音をもつ「黄海」は「ファンヘ　Hwanghae」となっている。

「江華島」は国語辞書にも載ることがあるので、この変化の跡が見られるか、二三の辞書に当たってみた。まず『日本国語大辞典』第二版（小学館　2001）は、「江華島」とその「事件」「条約」の三項目を載せるが、朝鮮語読みへの言及はない。中辞典では、『広辞苑』第六版（岩波書店　2008）が、参照項目として「⇨カンファド」を掲げる。電子辞書『デジタル大辞泉』（小学館）は、「江華島」の語義記述に「カンホワド。⇨―事件【江華島事件】」と古い読みを残している。『大辞泉』第二版（2012）の紙の辞書は新しい「カンファド」である。『新辞林』第一版（三省堂　1992）は、古い「カンホアド」を残している。今世紀刊行の辞書が変更後の

「カンファ」であるのは当然である。

かくてこの一件は落着したが、疑問が一つ残った。朝鮮語「華」のハングル表記は「화」、音声表記は［hwa］で、声門音［h］で始まる。新しい仮名表記は「ファ」、両唇摩擦音［ɸ］で始まる。わたしの耳はその違いになじめないのである。朝鮮語の母語話者はそれに違和感を覚えないのであろうか。というのは、日本人が片仮名「フ」で表記する英語、例えば「ファミリー＝family」が、韓国では 패밀리 と書かれるなど、'f'は激音［pʰ］で受け入れられるからである。

7　外来語仮名遣い

以上、中国の企業名「華為」の仮名表記、スペイン人の名前'Don Juan'の仮名表記と読みかた、韓国の地名「江華島」の仮名表記の変化について考えた。対象になった音声は中国語の［h］、スペイン語の［x］、朝鮮語の［h］、そして日本語の［ɸ］であった。

英語の仮名表記を自分の初級英語と比べるべく、千葉県の柏市立中学校二年生の孫に頼んで、級友十名にアンケートを試みた。'What is this?'ほか、疑問詞'which' 'when'を含む短文を示して、それらの読み方を問うたのである。その結果を示すと、what（ワット：7　ホワット：2　ファット：1）、which（ウィッチ：8　フィッチ：2）、when（ウェン：8　フェン：1　ホエン：1）であった。余りにもささやかな調査なので、これから何かを言うことはできないが、ワット型の増加、ファット型の出現、ホワット型の減少がうかがえる。

先に金田一氏の著書から引いた、「カルシウム」「カリウム」と書くたぐいは、原語の'um'という綴りを意識して規定した仮名づかいだという。この規定の理念をわたし流に換言すると、「外来語の歴史的仮名遣い」である。片仮名は、「si」の音なら「シ」の仮名で、「u」の音なら「ウ」の仮名で表記するというように、日本語史上に生まれた時から、「表音」機能をその存在価値としてきた文字である。今、'riu'の文字列を［ryu:］と読んでいるのに、それが外来語だからという理由で「リウ」と書くことは許せない、と金田一氏は言うのだろう。これに類する外来語の歴史的仮名遣いでかつて広く行われた語には、ラヂオ・ガレーヂ・スタヂアム・ブリッヂ、ビーヅなどもある。ノウハウ・甲子園ボウルは今も行われ、スタヂアムは企業名に残り、ビルヂングは名

古屋駅前に現存する。

日本の国語政策は、漢字の字数・種類・字体、仮名遣いの制定には極めて熱心だったが、外来語については淡白であった。早く国語審議会報告「外来語の表記について」（1954）が出たが、これは「報告」で止まって、内閣告示にはならなかった。新しい報告が内閣告示になったのは、その三十七年後の「外来語の表記」（1991）である。内容は広範囲にわたるが、その規定はたいそう緩やかで、例外と慣用を広く認めている。

その内閣告示を少し見ると、金田一氏が言及した項は、「カリウム」などが原則で、「アルミニューム」のような慣用もある、という寛大さである。「クァルテット」のたぐいは、「クアルテット」と書くことができるとした上で、「クワルテット」と書く慣用もあるとしている。三本立てである。『岩波国語辞典』第八版（2019）では、改訂方針に「ボランティア」を見本としながら、「スチーム」の慣用も「ステッキ」の慣用も認めているのが実情である。

この内閣告示の「前書き」には、「法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会生活において」、外来語の表記のよりどころを示すものだとあるが、その実効性はたいそう疑わしい。ほとんど野放し状態なので、これが収束する見通しはないと言うべきだろう。

追記　前稿の発行から少しおくれて、小椋秀樹さんの「書き言葉と話し言葉における外来語語末長音のゆれ」（『論究日本文學』109号（立命館大学日本文学会 2018.12））が出た。いわゆるビッグデータを扱った詳細な考察である。それには、ダラス事件の報道で、ケネディー大統領の表記が一様に「ケネディ」であったという、石野博史さんの論文が紹介されている。

附記　本稿をなすにあたって、朝鮮語について大阪大学の鄭聖汝教授の教示を仰いだ。

（2020.10.10　成稿）

（くどう・りきお　成城大学名誉教授）